

河村只雄日記について——「河村只雄日記行程表」をもとに——

齊藤 郁子 †

はじめに

- 1 河村只雄日記の概要
 - 2 「日記」の内容
 - 2-1 1936年（昭和11）
 - 2-2 1937年（昭和12）
 - 2-3 1938年（昭和13）
 - 3 河村の調査をめぐって
- おわりに
付録 河村只雄日記行程表

はじめに

社会学者の河村只雄は、1936年（昭和11）から5回にわたり南西諸島と台湾の調査を行った。河村の遺した資料は沖縄県公文書館（以下、「当館」と記す）に寄贈され、そのうちの写真資料はすでに整理がなされており、武智方寛氏によって被写体の特定作業も行われ、その成果は当館紀要第6号に掲載されている¹。

しかし、河村の調査・研究を跡付ける資料と見られる彼の日記は、その概要が知られているとは言いがたい。そのため、本稿では河村の沖縄調査とその背景などについて、当館所蔵の日記をもとに辿り、資料として利用に供する一助としたいと思う。

1 河村只雄日記の概要

当館で所蔵している河村只雄の日記は、「河村只雄資料」のうちの「日記」（0000049937、0000053811、0000061307。閲覧用マイクロフィルムはT00021098B。以下、「日記」と記すものは当館所蔵資料の日記を指す）というタイトルで整理されている資料である。これは1936～1938年（昭和11～13）の日記であり、河村が南西諸島と台湾を調査していた時期を網羅しているものではない。写真資料には1939年撮影と思われるものもあるのだが²、上記3ヵ年分以外の日記は不明である。河村の次男で資料寄贈者の河村望氏も「三九、四〇年の日記は、どうしたわけか手元にはなかった。」（河村望1999:p.545）と述べており、当館に寄贈される以前に所在が不明になっていたものようである。

これらの日記が書かれているのは、博文館が発売していた「常用日記」と銘打たれた1日1頁の日記帳である。末尾に「補遺」としてフリースペースが設けられている。この日記帳に河村は1日1頁をほぼ守り、1日の欠けもなく書き記している。調査に出かけていた日々もほぼ1日1頁の記述で、特に記述の多い日は末尾の「補遺」の部分に書き込みをしている。

また、日記帳には調査時のメモと思しき紙が数葉挟み込まれており³、調査内容を記録したと思われる

† さいとう いくこ 財団法人沖縄県文化振興会 一般嘱託員

¹ 武智方寛 2004 pp.115-133

² 武智 2004 参照

³ 例えば昭和11年の日記には、那覇に到着した10月22日から10月27日までの調査メモが挟み込まれている。10月22日に那覇港へ到着した際に出迎えてくれた人、旅館や県庁へ向かったことや、10月23日に奥武山公園の招魂祭に列席した後、糸満へ行った等の調査行程が箇条書きに記されている。

る資料が別に存在したこともうかがわれる。『南方文化の探究』の「宮古文化の探究」にも、「覚えがきの大事な手帳をなくして今その名前が思い出せないのは残念である。」(河村只雄 1999:p.223)とあり、日々の日記とは別の記録があったことを示す記述である。だが、河村がなくした手帳とは別の「調査ノート」とでもいうべきものが1冊当館に寄贈されている。市販のノートで表紙に「台湾から琉球/昭和十三年五月/調査の旅/no2」と書かれ、学術的な調査内容が書き留められているものである。

2 「日記」の内容

今回は河村のこの「日記」を、年月日、調査行程、写真や8ミリでの撮影、記述のある人物、『南島文化の探究』のどの部分に相当するかという点で整理し一覧表の形で示した(後掲「河村只雄日記行程表」)。

2-1 1936年(昭和11)

1936年の調査は、沖縄本島、久高島、宮古、八重山に渡っており、河村の著書『南方文化の探究』の冒頭、「琉球文化の探究」の部分にあたる。ただし、「琉球文化の探究では」旅の出発を10月16日としているが、日記には神戸出発を10月19日、3日後の22日に那覇入港の記述がある。

西表島の祖納を11月15日に出発し、16日には台湾・基隆港に到着、11月20日まで「視察旅行」に入っている。

2-2 1937年(昭和12)

この年の調査は7月21日に那覇港に到着してから、8月8日に沖縄を離れるまでの比較的短い期間で、7月25・26日は「講習会」が入っていた。25日は「非常時局と教学の刷新」という講演を行い、同日の夜は一般のための講演会で「非常時局克服の力」という演題で話している。26日は「家族・私有財産及び国家」という演題であった旨を河村は日記に記している。

この時の調査には、8ミリカメラを持参しており、日記にも浦添村字宮城の闘牛、今帰仁城、識名園、等々を撮影している。おそらくこの時のものが河村只雄資料のうちの「沖縄本島及び周辺離島の風物」の映像なのではないかと思われる。ただし、7月31日の日記には、8ミリのフィルムが暑さでとけて動かなくなり、これを直すためにフィルムを半分犠牲にしたと記されており、夏季の沖縄での調査の苦労もみてとれるものである。この年の調査は上記の映像資料を残したが、『南方文化の探究』にはこの時の調査内容はほとんど反映していないようである。

2-3 1938年(昭和13)

この年は、4月26日～5月20日までが台湾調査、5月21日に西表に到着してから6月15日までが八重山、与那国の調査で、6月16日に宮古へ入り7月10日まで滞在し調査した。この時には各地の豊年祭を見学し、現地の古老・神職たちから聞き取り調査を行っている。現在残っている日記を見るかぎりにおいては、期間の長さとともに内容も充実した調査であったと思われる。そして、この時の調査が『南方文化の探究』の「高砂族文化の探究」「八重山文化の探究」「宮古文化の探究」の元となったと考えられる。

河村の日記は、文字通り私的な「日記」であり、おそらく公表を念頭においては書かれてはいないであろうと思われる。というのは、『南方文化の探究』では、具体的に記述するのは憚られることも日記ではその事情がわかる記述が見られるからである。公刊されるものに記述するのは不相当と判断し河村があえて明かさなかった、島の現実もまたそこには記録されているのである。

3 河村の調査をめぐる

『南方文化の探究』にも、河村の調査には沖縄の教職員が協力していることがたびたび書かれているが、日記ではそれらの人物の名前が逐一挙げられていて、実際に河村がどういう人脈を頼って調査を行ったかがわかる。彼ら協力した教職員は「研究所関係のもの」「前研究員」（河村 1999:28 頁）と記されており、河村の職場である国民精神文化研究所と関わりがあったことがうかがわれる。

この国民精神文化研究所とは、『国史大辞典』によると、「第二次世界大戦前における文部省直轄研究所の一つ。一中略一『学生左傾』の対策として、国体・国民精神の原理を明らかにし、マルキシズムに対抗する理論体系の建設を目標とする研究機関の設立があげられているので、これをうけてこの研究所が設けられたのであろう。一中略一組織は研究部・事業部の二部から成り、事業部では、全国中等学校教員の再教育（教員研究科）ほか、いわゆる『左傾学生』の指導矯正にあたる研究生指導科があった。——後略」（田中久夫 1985:pp.692-693）という性格の機関であり、当時の沖縄県の教員達もこの教員研究科へ派遣されていたようである。この教員研究科は、将来を嘱望された教員が学校長から推薦される場合が多く、再教育期間は6ヶ月で、月々学資が支給されていた⁴。この教員再教育の事業を通して河村は沖縄の教員たちとの繋がりを得たものであり、教員研究科の同窓組織である「志同会」⁵のメンバーが河村の歓送迎会を開いていることからそれがうかがわれる。

「日記」には、沖縄の教員達の中には、河村の調査に同行し現地の住民との繋ぎをするなどコーディネーター的役割を果たす者もいたことが記されている。例えば、「日記」の1938年の6月11日に、小浜の「ノリト」「神歌」の採集の手はずを校長と山城訓導に整えてもらうよう依頼し、12日には山城訓導が数名の村の有力者たちに事前の説明をおこなった上で河村がさらに調査の主旨を述べ諒解を求めている。

また、河村は地元の教員に予備調査を依頼していたことを裏付ける資料も当館に寄贈されている。表紙には「昭和拾参年六月二十四日/調査事項/宮古郡/伊良部校」とあり、こよりで綴じられている。中にはガリ版刷りの調査依頼事項があり、その次に質問項目に対応する報告が学校の罫紙に記されている。その罫紙の上部欄外には人名が見えるが、これはその項目を調査した人物であろうか。河村は事前に現地の人々にこういった調査依頼項目を送付し、それに応える形で現地の教員たちが報告をある程度まとめていたことがわかるものである。

こういった現地の教員達や住民の協力を得ながら調査を行っているわけだが、それでも現地の人々に調査への協力が得られないこともあった。特にそれは神事に関わる調査に関してである。そこをあえて踏み込み、とくに禁忌と関わる神事や聖域の調査を行ったことに対し、河村には悪評がつきまわっているようである。

河村の調査に対して、子息の河村望は次のように記している。

「聞くとところによると、亡父は写真や八ミリを無遠慮に撮りまくって、調査地の人びとから顰蹙だけでなく、怒りを買っていたようである。亡父が五回目の調査の後すぐ死んだことについても、入ってはいけない神聖な場所に入り、写真や八ミリを勝手に撮ったのでバチが当たって死んだのだと信じていた人も多くいたと聞いている。亡父のしたことは、もちろん正当化されるものではない。——後略」（河村望 1999:546 頁）。

バチが当たったかどうかはともかく、河村の調査には上記のような言説がつきまとうことも事実である。

⁴ 前田一男 1982 : pp.62-63 参照

⁵ 前田 1982 : p.63 参照

野口武徳も、南島研究史において河村を評価する者が少ないことをふまえ、「それどころか、河村只雄はフラッシュをたいて島の人を驚かせたので、東京へ帰ってから病気で死んだのであるというような話を、好んで私達に語りつぐのであろうか。現実には河村が歩いた土地に行き、そういう話を聞かされたこともある。しかし、そういう話題になる人は、河村只雄自身も聞いているし、この私も多く聞かされている、まだ後述するように、河村自身、ある程度自覚してもいた。しかし死の直前まで沖縄を歩きつづけ、説明する時間も機会もなく彼は死んだ。残されたのは二冊の名著といじわるな風評だけであった。」(野口武徳 1980:p.116) と、河村の調査についての風評を述べており、河村の調査が負の方向に伝説化している様子がうかがわれる。

また、河村望は、「このように話が進んだなかで、さらに小屋から、調査時に収拾した資料として、鏡、勾玉、宝貝、わらざん、祭祀具などがでてきた。亡父が黙っていろいろな調査地から、このような貴重な資料をもって来るなどということはあるまいと思うので、なぜこのような貴重なものが家にあったのかはわからない。ただ、沖縄の人に頼まれて、国立博物館に資料をもっていき、博物館で受け取るのを断られて、亡父ががっかりしていたという話を、私は母親から聞いたことがあるので、そのような事情も部分的に関係していたのかもしれない。」(河村望 1999:pp.545-546) と記している。河村家に残されていたこれらの物の入手経路がどのようなものであったか、今となっては確かめるのは困難であるが、最後の沖縄調査から戻って間もなく河村が急死し、そのまま物品が残されることとなった可能性もあろう。しかし、また、「日記」には河村が聖域と古墳から瓶をもってきたということが記されており⁶、河村の功罪の「罪」の部分を記録している。

だが、それと同時に、水不足の水納島へ水を運ぶため船を借りようとしたり(結局とりやめになるが)、撮影した写真を集落の大勢の人に送るなど、あたたかいエピソードも見ることができる。著書『南方文化の探究』に結実する以前の、生き生きとした調査の記録であるということができよう。

おわりに

以上、見てきたように、河村の日記には、現地の教員たちの協力によって調査を進めていたことが詳細に記されている。彼らは予備調査をおこなう場合もあり、また河村に同行し通訳やコーディネーター的働きをするなど、大きな役割を果たしたのが、国民精神文化研究所の「研究員」を修了した教員たちという人脈である。必ずしも評判の良くない河村の調査に彼ら教員たちが同行し協力していたのは、文部省直轄研究所である国民精神文化研究所員への協力ということの他に、どのような背景があったのであろうか。河村が聖域に足を踏み入れる調査に、彼らはどのような考えから協力したのであろうか。これについては河村の「日記」から読み取ることはできない。

当時の教員たちも政府の教育政策に沿って動かざるを得ないものであり、思想教育に深く関わる国民精神文化研究所の教員再教育システムと河村の沖縄・台湾調査とが、当時の教育政策の流れを背景にすると、なんらかの方向性を示していたという側面はないのか。当時の沖縄の教育界を考える上で大きな問題をはらむものであり、稿を改めて考察したいと思う。

また、河村の『南方文化の探究』については、同時代の田中俊雄による厳しい書評⁷もある。当時か

⁶ 1938年の6月22日に来間の「ミヤカ」から小さい瓶を、7月6日には池間の古墳から古い瓶を、それぞれ持って帰ったことが記されている。

⁷ 田中俊雄 1940では、『南方文化の探究』に対し、「著者の専攻する学問が著者の体内に浸透して、ともに肉体化した著者のもつ直感の眼の低さ」「学者といふものが、真に眼のきいた文化の観察者であるならば、われわれ素人がその対象とするもの、根元となって働いてある本能のみこめないですごしてきた、さういふものを明らかに摘出して、われわれにしめしてくれることではあるまいか。」など、河村の記述の食いたらなさを記している。

ら現代に至るまでの、河村只雄の研究に対する評価を研究史の中で考察することも課題としたい。

参考文献

河村只雄[著] 『南方文化の探究』(創元社 1939年)

河村只雄[著] 河村望[解説] 『南方文化の探究』(講談社 1999年)

『河村只雄資料』「日記」(T00021098B) 沖縄県公文書館所蔵

河村望[解説] 河村只雄[著] 『南方文化の探究』(講談社 1999年) pp.544-560

小島瓊禮 「河村只雄の時代」『新沖縄文学』37号 (沖縄タイムス社 1977年) pp.127-134

武智方寛 「河村只雄写真資料の利用に当たって—特に被写体特定作業について—」 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部[編] 『沖縄県公文書館研究紀要』第6号 (沖縄県公文書館発行 2004) pp.115-133

田中俊雄 「書評 河村只雄著『南方文化の探究』」『月刊民芸』(日本民芸協会 1940) pp.44-45

田中久夫 「国民精神文化研究所」 国史大辞典編集委員会[編] 『国史大辞典』第五卷 (吉川弘文館 1985) pp.692-693

野口武徳 「河村只雄」『南島研究の歳月』(東海大学出版会 1989年) pp.114-124

前田一男 「国民精神文化研究所の研究—戦時下教学刷新における『精研』の役割・機能について—」『日本の教育史学』第25号 (講談社 1982) pp.53-71

付録 「河村只雄日記行程表」

凡例

・この資料は、沖縄県公文書館所蔵「河村只雄資料」の「日記」(0000049937、0000053811、0000061307)の記載内容のうち、沖縄・台湾調査に関する記述を整理し、一覧表の形にまとめたものである。なお、閲覧・複写には閲覧用マイクロフィルム (T00021098B) を用いた。

・漢字は原則として新漢字を使用した。

・判読不能の文字は「□」とした。

・記述は原則として「日記」にならったが、補足が必要と思われる部分[]で示した。また、「日記」からの引用は「 」で示した。

・見出しは下記の項目を左から配列している。

① 年 (西暦の下2桁を記載)

② 月日

③ 行程

④ 撮影 (写真や8ミリでの撮影に関する記述)

⑤ 人物 (特記記述のある人物。ただし、「行程」に記載した人物については省略した。また、敬称は原則として省略した。)

⑥ 『探求』『南方文化の探究』のどの部分に相当するかを略号で示した。『南方文化の探求』は初版(1939年発行)の篇をもとに、「琉球文化の探究」=1、「高砂族文化の探究」=2、「八重山文化の探究」=3、「宮古文化の探究」=4とし、各篇の節番号との組み合わせで示した。例：1-4=「琉球文化の探究」の4節「那覇・首里の第一日」の内容

年	月日	行程	撮影	人物	『探究』
36	10/19	12時10分神戸港から出帆。			
	10/21	正午頃名瀬港入港。午後2時半出帆。その間、名瀬港見物。			
	10/22	那覇入港。午前7時上陸。蓬莱館[宝来館] (旅館)へ案内される。県庁訪問。波上宮参拝。宮司の特別な好意により宝物珍品等を見せてもらおう。首里城見学。島袋源一郎の案内で博物館見学。夜、志同会のメンバーと懇談。		出迎え：樋口、千喜良、島元視学、新崎、仲田、川畑、阿波根、玉城 首里城同行：千喜良、樋口、新崎	1-4
	10/23	奥武山公園の招魂祭列席、その後糸満へ。白銀神社[白銀堂]参拝。糸満見学の後、市内の六新聞社に挨拶。25日から久高島へ行く予定であったが先方の都合が悪く、先に国頭方面へ行くこととなった。		朝、宿訪問：樋口、新崎 糸満同行：千喜良、樋口、新崎 糸満案内：玉城泰一糸満小学校長	1-5~8
	10/24	午前9時国頭行きバスで名護へ出発。郷土研究に熱心な沖田第三中学校長に挨拶、懇談。奥行きを決意。午後5時、名護出発、辺土名へ向かう。大城旅館泊。		バスに同乗：千喜良	1-11
	10/25	午前7時10分前、宿の女将が借りてくれた自転車で辺土名出発。座津武の小屋に自転車を預け徒歩で出発。途中に滝を見る。宜名真影。	転んだところを自動装置で写真撮影。	辺土から奥へ案内：伊波辺土小学校長	1-12~16

		の共同店で着替えを購入。辺土小学校で伊波信光校長と面会。歩いて奥に入る。奥小学校の比嘉徳仁の世話で共同店主任・宮城久善、郵便局長・金城親昌らから奥集落について聞き取り。 奥を午後3時半に辞去、4時45分辺土小学校に到着。5時30分宜名真出発、6時半座津武到着、自転車を押しながら徒歩で辺野喜へ。途中、宇嘉で青年団の二人に自転車を押ししてもらおう。7時半辺野喜小学校到着。校長宅に泊めてもらう。	共同店を始めた糸満盛邦にも面会、写真撮影。		
10/26		早朝に出発、7時15分辺土名着。9時10分辺土名着、12時前に名護着。那覇行きタクシーに乗り午後2時半に宝来館へ帰る。 琉球新報と沖縄朝日新聞の記者が滞り。 夜は土の待合で歓迎会。		歓迎会：志同会メンバー、川平女子師範校長、県視学	1-16
10/27		午前8時15分女子師範学校へ行き講演。その後久米島へ行く予定であったが強風で出航不能のため首里・那覇市内見学。崇元寺、尚公爵家、金武御殿、泡盛醸造場、円覚寺、霊御殿、山の洞窟でのパナマ帽子編みを見る。 那覇へ帰り葬式のある家の墓を見せてもらう。図書館に島袋全発館長を訪問。必要な資料を謄写してもらい東京へ送付するよう依頼。 午後5時半宿へ帰る。熱発のため夜8時頃看護婦、9時半頃医師に来てもらう。夜10時過ぎから頻繁な便通があり、アメーノ赤痢を疑う。琉球新報と沖縄朝日新聞に、奥調査の感想が掲載。		迎え：新崎 案内：仲田、新崎、川畑 見舞い：長谷川、樋口	1-17
10/28		午前9時頃比嘉医師が診察しアメーノ赤痢と診断、注射をうつ。		見舞い：「研究員の方々」	1-17
10/29		宿で看護婦から手伝いに来ている稲福ツルという女性より琉球の伝説を聞く。 写真屋からこれまで撮った写真の焼き付けをしてくる。	記念に看護婦・稲福ツルの写真を撮る。		1-17
10/30		比嘉医師の診察を受ける。午後4時頃、学務部長・佐藤幸一の見舞いあり。			1-17
10/31		前研究員・玉城泰一に明日の久高行きの準備をまかせる。中食後、波の上宮へ人力車で詣でる。帰りは徒歩。夕食後、仲田・樋口が来て那覇の「銀座」へ散歩。「両師範学校長」が見舞いかたがた訪問。			
11/1		与那原港から久高島へ渡る。久高小学校長から風葬、班田収授の土地制度、祝女、根神の制度の説明を聞く。帰りに生きたエラブうなぎをもたらす。	祝女、根神の写真を撮る。	迎え：佐藤学務部長、島元祝学 案内：新垣（知念村） 同行：佐藤、島元、玉城、仲田、高原、阿波根 久高案内：久高小学校長	1-18

11/2	午後1時～2時二中で講演、その後一中で講演する。終了後、琉球新報社長・太田朝敷を訪問。宿へ戻り、辻見学へ。琉球舞踊を見る。		迎え：阿波根 琉球新報へ案内：阿波根、仲田 辻へ同行：(阿波根、仲田) 樋口	1-19～22、24
11/3	明治節の遙拜に県庁へ行く。式後、首里の最古の亀甲墓・伊江男爵の墓、中頭郡の「世衰」[ようどれ]参詣。午後、識名園見学。夜、那覇の祭りで綱引き行列を見学。		首里案内：仲田、阿波根、新崎、高原	1-25
11/4	男子師範学校で講演。午後4時から、第二小学校で県教育会主催の講演会に出講。「本県の財産制度並びに家族制度に就いて」。終了後、辻の料亭で送別会。琉球舞踊を見る。	「師範からの帰りにはカメラを活用させながらテクク歩るいて帰った。」	送別会：新崎、阿波根、川畑等	1-26
11/5	午後、県庁、教育会、図書館等々に挨拶に行く。午後4時40分、出航。	「波上宮の宝物『天下逸品の男根』の写真があいにく催承喜の写真とダブッテ駄目になったので……」	見送り：佐藤幸一学務部長、島元視学、島袋源一郎、前研究員全員	1-26
11/6	午前10時前、宮古島へ到着。日の丸旅館へ投宿。午前中に支行訪問、挨拶。12時から城間宅で新聞記者を招いて中食会、懇談。午後から新聞社へ挨拶廻り。		出迎え：城間(宮古高女校長)、城間夫人 中食会：瀬名波進宮古民友新聞社長、垣花恵政宮古朝日新聞主筆、平良好児(宮古時事新報)等10名ほど	1-30
11/7	島尻へ向かい見学。くり舟2隻を雇い大神島へ渡る。大神島見学。小学校を見る。風葬、島の神について調査。親神に会う。島の聖域「イワヌイワヌパナ」の写真撮る。	親神の神衣裳を同行の城間が身につけて撮影しようとしたら親神が震え出したので、着用せず手にとって撮影、ことなきを得る。 聖域「イワヌイワヌパナ」に近づいて写真を撮る。	同行：垣花、山内大神島小学校訓導、城間 大神島案内：山内大神島小学校訓導	1-31
11/8	文献調査。10時まで城間宅。その後宿で静養。		訪問：城間	
11/9	宮古中学校にて中学生・宮古高女生に講演。午後、市内見学。人頭石、墓を見る。			
11/10	午後1時、タクシーで狩俣へ向かう。1時40分狩俣小学校到着。狩俣地方を見学。船をよとって4時20分に出帆、5時頃池間へ入港。ただちに小学校へ赴き職員達から土地の習俗習慣等を聞き取り。集落は祭りの最終日で踊りがあつたが、話しているうちに踊りを見学し損なう。	途中、国立瀨原養所を撮影。	狩俣案内：平良寛良訓導、川満恵公、狩俣金五郎、狩俣吉蔵等 宿泊：校長宅	1-31
11/11	午前中、池間島内見学。墓の形式を考察。午後1時半、池間出帆、2時頃大神島へ渡る。前回見落とした所を4時頃まで見学。それから狩俣へ渡り小学校を訪問、馬車を雇って宿へ。		大神島へ同行：校長以下4.5名の訓導、池間の教員達 馬車手配：平良寛良訓導	1-30、31
11/12	古墳を見学。午前10時のバスに乗り城辺の西城小学校へ。下地訓		友利へ同行：下地馨(城辺・西城小学校)、	1-32

				島尻勝太郎 (城辺小学校)	
				迎え：トラウツ博士夫妻、佐藤学務部長 見送り：城間等	1-33
				出迎え：岩崎卓爾の代理・正木、喜舎場 永珣、比嘉賀新(視学)、平安名盛忠(石 垣測候所長)、宮良格(先島朝日新聞記 者)等 案内：喜舎場、正木、牧志宗得(医者)	1-33
			星立の祭りの踊りを撮影。	説明・見送り：仲里朝貞(防疫医)、古 見英知(防疫雇)	3-2
				台北出迎え：国府 懇談会：谷本高校長、大浦視学官、国府・ 木原・小池(前研究員)	
				駒迎え：本田、小倉 高雄・屏東案内：町田情彦師範書記 高雄駅で挨拶：大野雅楽之助市教育課 長、和田猪之助書記	
				台南・嘉義案内：小倉 台中出迎え：段証	
		導から地方の様子をきく。古墳ならば城辺より友利が良いと勧めら れる。自転車借りて城辺の小学校へ向かう。午後2時45分友利 着。土地の青年と友利校の教員の案内で古蹟見学。5時30分友利 出発、1時間で西城小学校着。7時15分バスに乗って平良へ帰る。 下地が平良まで送る。城間と遅くまで雑談。明日の出立の用意をし て12時就寝。			
11/13		午前9時、城間と発動機船で湖北丸に式典列席の人々を迎えに行く。 その後支庁へ行き小懇の後学務部長らと宮古中学校の授業を参観。 その後展覧会を参観、午後3時船に乗る。城間等と別れ湖北丸へ乗船。 4時頃港外に出、狩俣の沖合で9時頃まで待ち出帆。			
11/14		午前6時頃石垣港外着、7時過ぎに上陸。岩崎卓爾宅へ案内され、 岩崎・喜舎場より八重山の民俗について聞く(河村が滞在できな いため、必要な要点を文書に纏めていくれた)。岩崎宅で八重山料 理の朝食、食後、喜舎場、正木の案内で墓の見学。牧志宗得の自家 用ダットサンで宮良川に案内。午後6時まで石垣町滞在、湖北丸へ 乗船。			
11/15		早朝、西表港着。祖納のマラリヤ防遏所を訪問。マラリヤ・フィラ リヤについて知識を得る。星立集落を見学、大歓迎を受け、前日の 祭りの踊りが急遽催される。午後3時頃集落を辞去し湖北丸へ帰る。 午後4時出帆、台湾へ向かう。			
11/16		朝8時頃基隆港着。汽車で台北へ向かう。国府・木原・小池で「河 村所員島内視察日程」を作成。国府の案内で台北神社参詣、総督府 に挨拶、[台湾]大学民族学研究所資料室を見学。午後木原の案内で 建功神社、植物園博物館、龍山寺高校、師範学校等をまわる。夜、 台湾料理店で懇談会。第一師範へ引き上げ、午後10時35分の急行 で南下。			
11/17		朝7時6分台南着。高雄、屏東をまわる。屏東では蕃社の家屋模型、 台湾製糖で「瑞竹」を見る。11時22分屏東発、午後0時6分高雄 着。和田書記の案内で市営の浴場付き食堂で中食。市役所の自動車 で寿山へ。4時35分高雄発、5時46分、本田・小倉を迎えられ台 南に到着。本田台南師範学校校長の官舎に宿泊。夕食後、師範学校 の教員2,3名、小川茂富らと懇談。			
11/18		朝10時までに小倉の案内で台南神社、開山神社、公園、赤崁楼、 孔子廟、安平州庁等を歴訪。午前10時から師範学校で1時間全校			

		生徒のため「素人の教育論」について講演。午前11時55分台南発の列車で嘉義に向かう。嘉義では予定を変更して呉鳳廟を参詣。植物業、製材所を見学。嘉義で小倉と別れ、午後5時25分の列車で台北に向かい、8時4分台中着。段証の官舎に宿泊			台中案内：段証 台北出迎え：小池、国府、木原	
11/19		台中見物。州庁の自動車で彰化八卦山へ行き温泉に入って少憩。午後1時44分彰化を出発、6時49分台北着。今川専売局長を訪ねて挨拶。教育会館に宿泊			北投・草山案内：小池、駐在所巡査 見送り：小池・木原両前研究員、谷本台 高校長	
11/20		午前8時半、小池が宿へ来、9時発のバスで北投・草山へ出発。草山温泉に登り、貴賓館、公別館、教育会の林間学校等を参観し、共同浴場で中食をとって帰る。午後3時、台北出発、4時半基隆からみづほ丸に乗り出発。				
11/23		午前7時半門司上陸。				
12/8		研究所で琉球旅行の写真整理		「何しろ何百枚といふ多数の写真をとったので・・・」		
37		兵庫港から波上丸に乗船、出帆。				
7/20		名瀬港着、数時間後出港。				
7/21		午前10時、那覇着、蓬来館へ入る。夕方波上宮に参詣。夜、辻の三杉楼で志同会のメンバーによる歓迎会、琉球舞踊を見る。料亭・竹之家で二次会。			出迎え：樋口、千喜良等（欄外に西岡、岡阿波根、平木、中田、荒崎の名前あり） 参詣同行：城間（宮古より）、坂井督学 官	
7/22		暴風雨のため宿に留まる。午後8時、北支事変に関する「県民大会」を見に公会堂へ。ちようど出会った樋口と那覇会館に寄り、12時過ぎに宿へ帰る。				
7/23		午後1時頃名護へ出発。途中、浦添村宇宮城で闘牛見物。午後6時頃名護へ到着、厚養館へ入る。夕食後8時過ぎから料亭一楽で高女・中学の教員たちによる歓迎会。名護の民謡や踊りを鑑賞。睡眠不足のため11時頃抜け出して旅館へ帰る。		8ミリで闘牛を撮影。	同行：仲里視学、神田精輝第三中学校長、 油谷第三高女校長	
7/24		午前5時半起床、小一時間町を散歩してから朝食、8時半過ぎ出発。第三高女を坂井督学官の視察に同行。運天港をまわり「百按司」の墓に詣でる。今帰仁の阿心理恵按司所蔵の曲玉と今帰仁のろ殿内の曲玉を見る。本部半島を一周して名護に午後3時頃帰着。坂井督学官が第三中学を視察するのに同行。油谷校長の案内で名護城嶽に上り、名護のろを訪問し所蔵の曲玉を拝見。5時頃に名護出発、8時頃宿に帰る。		今帰仁城をはるかにのぞみ、8ミリで撮影。	同行：坂井督学官 見学同行：油谷校長	

7/25	講習会開始。午前9時開始。「非常時局と教学の刷新」を講演。受講者は240、50名くらいか。午後8時半から一般のための講演会のため昭和会館へ。「非常時局克服の力」を講演、聴衆130名。11時半ころ宿に帰る。		講演者：坂井督学官	
7/26	講習会2日目。「家族・私有財産及び国家」を講演。午後2時10分前から座談会。夜、料亭幸楽で「一般歓迎会」。福井楼で二次会。第三左馬楼で三次会。午前二時半に抜け出して旅館へ帰る。		歓迎会：坂井督学官 歓迎会出席：佐藤、平野。	
7/27	午後4時頃沖縄県に動員令が下る。 午後識名園見学。午後6時から風月[閑亭?]に招待。左馬楼で二次会。	「活動に全景をよく収めておいた」	識名園：佐藤部長、樋口等 招待：尚師範学校長、視学官 左馬楼：平野	
7/28	午後3時から辻の昭和楼で琉球舞踊を見る。	昭和楼で仲田が選抜した名妓の踊りを8ミリで撮影。	辻：坂井督学官、仲田精利、西岡、樋口	
7/29	午前9時23分那覇駅発の汽車で糸満へ。小学校の玉城校長を訪ねる。校長が風邪のため訓導に案内してもらう。	「今度は幸地門中の墓その他を写真に撮るのが主なる目的であった。」		
7/30	午前8時伊福丸出帆、午後2時少し前伊是名島到着。仲田へ向かい村役場を訪ね、伊是名小学校の新垣校長を訪問、土地の様子を聞く。午後6時野甫に到着。栗国小学校校長金城仁吉を通じて同氏の叔母のノロから午後10時頃まで話を聞く。野甫分教場の教員住宅に泊めてもらう。		同行：仲田精利、宮城（仲田義弟）	
7/31	朝から拝所見学。ウフヤママ→アフリヤママ（テラチヤママ）ミヘジ拝所。区民の好意によりクリブネに乗り午前10時野甫船出、30分ほどで島尻に到着。1時間ばかり歩いて我喜屋に着き、伊平屋小学校へ。少憩の後拝所ハタクマに参詣。中食後、田名集落へ。地元の人から案内してもらい、ノロの女性から話を聞く。小学校に戻り、校長の世話で農家へ泊めてもらう。	ウフヤママで拜んでから配所を8ミリで撮影するがフィルムが暑さでとけて急に動かなくなる。これを直すためフィルムを半分犠牲にする。	拝所案内：玉城松吉区長、金城仁吉 田名案内：国吉庄八、新垣幸吉	
8/1	台風のため足止め			
8/2	雨の止んだ時をみはからって学校から高等小学校読本を借りてきて読む。			
8/3	新垣訓導の家から本を借りてきて読む。午後、風が弱まり雨止む。土地の豊年祭、綱引き行事に案内される。	「ライカと8ミリとを携へて出かけた。」		
8/4	午後、集落の家の構造を見学。			
8/5	午前8時10分くり舟で伊是名島へ向かう。2時間かかって到着、馬をやとって諸見の仲田の実家へ。午後、伊是名城跡の拝所、ノロ殿内等を見学。		案内：仲田	

8/6	宝丸を待つが来ず、午後7時頃から役場職員や学校の先生など十数名と11時まで座談会。			村の青年が船を見張ってくれる。	
8/7	宝丸が来ないため、諸見から集落の青年の漕ぐくり舟で本部へ渡る。途中、発動機船・与論丸がやってきたので乗せてもらう。本部で荷物の上げ下ろしをして20分ばかり後那覇へ向かう。宿へ戻り食事と湯を使ったあと散髪。訪ねて来た平野と辻に茶を飲みにいき12時頃まで雑談。			仲田の弟が船を見張る。 くり船は青年4人で操作。 那覇の宿へ平野が訪ねて来、一緒へ上へ。	
8/8	朝、買い物を通し、午前10時頃から知事、学務部長に挨拶に行く。その後首里で写真撮影に行く。風月で中食、宝来館へ帰る。午後4時出帆の湖北丸に乗る。波止場で諸氏の見送りを受ける。	首里で写真撮影。		県庁へ案内：平野。旅館へ見送り：長谷川、樋口、西岡、仲田 波止場で見送り：蔵重知事、佐藤部長、新崎、川畑、諸見里主事、仲里視学	
8/9	午後名瀬寄港、上陸せず。				
8/30	経堂の安田宅で琉球で写した8ミリの試写。「十六巻あったが九巻だけ写さして貰ひあとは帰って写すことにして、映写機をかりて帰った。……何しろ始めなので失敗が多かった。」				
4/24	門司から高砂丸で出発。				2-1
4/26	基隆港着。急行で台北へ。教育会館別館に入る。藤谷に案内してもらい台湾神社を参拝。帰りかけに移川教授宅を訪問し高砂族について話を聞き指導を受ける。晩は亭(亭名記載なし)で晚餐会。教育会館泊。			出迎え：藤谷その他前研究員 晚餐会：谷本高校長、須藤教授、藤谷、前研究員	2-1
4/27	総督府へ挨拶に行く。森田長官と面会。理蕃課で蕃地入りの準備してもらおう。中食後、1人で台北帝大を訪問し、土俗学教室で移川教授、宮本助手から現地の様子を聞く。午後11時半の急行で屏東へ出発。			総督府：森岡長官 中食：藤谷	2-1
4/28	午前9時高尾到着。9時13分の列車で屏東へ向かう。サンティモンの堤防まで自動車で行く。バクヒョーでサンティモンへのつり橋架橋作業を見る。サンティモンの駐在所で少憩の後、武装した警官の護衛付きで現地の山かごに乗りトクブツ社へ向かう。途中、旧タバサン社の首だなを見学。午後7時頃トクブツンに到着。公学校の生徒が並んで入社を歓迎。中馬真助(巡查部長宅)に宿泊。			星野力学務部長が高尾駅に出迎え、屏東まで同行。 トクブツン案内：訓導・安藤	2-1、3、5
4/29	トクブツン公学校での天長節に来賓として出席。式後、蕃社を見学してから午前11時半、かごで警官に護衛されタラマカウ経由でライプアンに向かう。タラマカウに午後2時頃到着、屋敷・少憩の後出発、ライプアンへ7時頃到着。ライプアンの枝元、安藤、二人の巡			同行：安藤 ライプアンで会う：枝元	2-4、7

		査の5人で宴会。河村は疲労のため途中で休む。				
4/30	枝元に頼みライブアンの踊りを見せってもらう。午後、現地の人が「第一のハリシンの山」として見学。現地の人々が聖所を拝する様子を観察。夜、枝元から現地の事情を聴取。11時から住民を集め、旧来の陋習打破の演説を行う。演説の後、住民の答辞。12時過ぎに就寝。	踊りと人々の写真を撮影。	案内・説明：枝元	2-9		
5/1	午前8時ライブアンをカゴで出発。タラマカウに正午着。中食。河川横切った所に屏東郡の村田視学が自動車を迎えに来ており、屏東で共に夕食。11時頃山陽ホテルへ。	現地の男性を撮影。	迎え：村田屏東郡視学	2-12, 13		
5/2	昨夜来の下痢甚だしく熱発もあったようだが午前8時10分発潮州の列車で出発、乗合で台東に向かう。途中恒春に11時半着、午後2時の台東行きノバスに乗り換える。体調不良もあり途中日本人の旅館を探して休む(実は女郎屋だったことがあとで判明)。8時半に台東ホテルに到着。			2-13~15		
5/3	医者の診察を受ける。[郡?]庁に行き塙警務課長に挨拶。台東港から船で午後4時に出発。			2-16		
5/4	紅島嶼の南港は波が高いため、島の三原巡査が船長に頼んで北港に回ってもらう。10時半頃上陸。イワギスから駐在所のあるイモルルに向かい峠を越える。目的地に到着後、静養。			2-16	台北大の奥田教授一行から果物をもらう。	
5/5	9時頃から台北大の奥田教授の調査開始、河村も傍聴させてもらう。					
5/6	ヤミ族の種痘について記述。					
5/7	奥田教授の調査に加わり島の様子を聞く。					
5/8	奥田教授と共同で社会的調査。夕食後、奥田から基の教授を受ける。					
5/9	島の青年を通訳として単独調査。9時頃三原巡査から、危篤の島の子供のために菓の提供を依頼され、アスピリンと胃腸薬を渡す。が、それから30分もしないうちに子供が亡くなる。葬式の様子を観察。11時出棺。墓に埋葬。葬式を済ませて12時半に戻る。	葬式の様子をカメラで撮影。		2-24, 25		
5/10	記念に頭目連、通訳連と一同で記念撮影。午前中調査。午後、通訳シガリフスに案内させイラタイ蕃社の見学。					
5/11	乗る予定の船が島に来ず、そのまま島に滞在。朝6時頃、一昨日葬式を出した家の夫婦が川でミンギをするのを見、記述。			2-25		
5/12	午前7時にチヌリ克蘭ンに乗り込み、めなど丸に乗船。8時20分頃出帆。午後3時台東に上陸。庁に挨拶に行き、その後台東ホテル		船に同乗：奥田教授一行	2-34		

					通信：ラガロ青年		2-35
	に入る。 午前9時、大東庁へ行き広重理蕃係長と打ち合わせ。大南社の見学。アラコアンと称する青年集会所に案内され、老人数名をよんでもらい調査。午後4時過ぎに調査を切り上げ利家へ自転車で向かう。午後9時頃から12時頃まで利家を相手に調査。警官らの宅で食事、宿泊。 午前9時20分乗合で馬蘭社へ出発。老人から調査。アミの蕃社を米田の案内で見学。その後歩いて台東へ帰るが途中でバスに乗る。宿の近所で散髪後宿へ帰る。				馬蘭社での世話：種子田部長、米田静 通信：大村和一（アミ青年）		
5/13					タルコ蕃社の機織りを見せてもらい写真撮影。		2-41、42
5/14	午前7時半台東発のガンソリン急行車で花蓮港へ向かう。花蓮港到着後庁へ行き中食。タクシニーで銅門というところのタルコ蕃社を見る。午後6時半銅門を最終バスで出発し花蓮港の筑（空白）旅館へ入る。 朝7時15分発の蘇澳直行のバスに乗りエカドサンで下車。駐在所に大城亀吉巡査を訪ね、ウミンヤドという通訳と、三人の古老を相手に11時まで調査。11時30分の上りバスで飛行場へ向かう。12時過ぎに飛行場着。午後1時30分飛行機が離陸。2時に宜蘭着、さらに30分で台北着。松山飛行場から自動車で教育会館へ。				駐在所：大城亀吉巡査 通信：ウミンヤド 聞取り：ハロンバイ、ウイランラバ、ハロンワタン		
5/15					挨拶：総督府長官、理蕃課長、奥田教授		
5/16	朝9時頃から台北帝大に行き松元常治の卒業論文を読ませてもらう。理農学部の教員達と会食。文政学部で土俗学の宮本助手、社会学の岡田譲等と話して帰る。帰りがけに栄町で夕食。偶然総督府の原と会い一緒に活動写真を見る。 午前11時頃、専売局へ行き今川局長へ挨拶。午後、土俗学教室で宮本から、これまで撮ったフィルムを批評してもらう。4時45分大衆を辞し教育会館へ。芝山巖へ御参りし、菅林署のクラブで温泉に入る。夕食後10時頃帰宿。 1時40分過ぎ教育会館を出発、2時、基隆駅到着。湖南丸に乗船。 早朝西表島着。曾祖[林]に渡り仲里を訪問。干[星]立へ行き、その後仲里宅へ戻り中食。6時頃帰船。 朝7時西表出帆、石垣へ向かう。11時石垣町へ上陸。旅館へ入り喜舎場永珣と調査日程を協議。岩崎卓爾の霊前に焼香、夫人に挨拶。			面会：宮本助手、岡田譲			
5/17					専売局：今川局長 大学：宮本、浅井（言語学） 芝山巖同行：藤谷		3-1
5/18					祖納への小船：石垣町の石垣助役		3-2
5/19					出迎え：視学（名前不明）		3-2、5
5/20							
5/21							
5/22							

	測候所、役所、牧志医師などに挨拶した後宿に帰る。			
5/23	波照間行きのため喜舎場と食料品の調達。	台湾の写真ファイルの整理。		
5/24	午前10時10分前波照間行きの大福丸出帆。午後3時、波照間着。6時過ぎに賀屋本伊佐の家に入り、食事は村の医者のところ取る。区長に依頼して老人4人に来てもらうよう手配。	見送り：浦崎視学	3-6	
5/25	午前9時半過ぎ、老人達から聞き取り調査開始。9時間ほどおこなう。	聞き取り：内原真勢、田盛典利、小成美屋久 同行：喜舎場永珣		
5/26	午前8時半から前日に引き続き老人たちから1時半まで調査(年中行事)。午後は3時半から8時過ぎまで調査。東京の自宅ほか2,3手紙を出す。			
5/27	午前8時10分から1時過ぎまで昨日に引き続き聞き取り調査(年中行事について)。午後2時から7時まで、夕食後8時過ぎから12時まで調査。	聞き取り：小成美屋久ほか3人		
5/28	1日島巡り。波照間島の名所旧跡、拝所を教員の案内で回る。野御嶽で迷う。ミシユク御嶽、6時頃宿に帰る。明日乗るはずであった石垣行きの波照間丸が西表へ行くことになり乗船を取り止める。	同行：鈴木小学校長、教員、島の老人	3-8	
5/29	与那国から来る金栄丸が石垣へ行くこと聞き乗船。石垣で夕食後、出征家族慰問のための土地の芝居を喜舎場と見に行く。	同行：喜舎場永珣		
5/30	朝、牧志医師が訪ねてくる。午前中支庁、喜舎場宅を訪問。夕方、浦崎視学から竹富島行きの船が出ることを聞き、急遽午後6時40分発の発動機船に乗る。40分で竹富島へ到着。川上旅館へ入る。宮良永益校長、宮良賢貞訓導、前新雄三訓導等が来て調査の打ち合わせ。11時夕食。		3-13	
5/31	午前9時頃、島の古老達が集まってもらい「ノリト」「神歌」の調査。1時頃、一同で中食。その後拝所巡り。午後3時15分から部落団体会「同志会」の総会。30分ばかり河村が話をする。4時過ぎ、斜り船を雇って竹富から石垣四箇に向かう。10時頃、牧志医師に誘われ、喜舎場と共に「辛菜」で琉球舞踊、歌を鑑賞。	調査：上間廣起前村長、上勢頭保久利、細原加那、石川ウト司、仲盛マイヅ司、与那国加那区長	3-13	
6/1	与那国島行きの金栄丸に乗船。午前8時半出帆。船の船尾に垂れてあった糸に2尺5寸ばかりのサワラがつかかり、ボーイがそれを刺身と汁にし屋食のおかずにする。12時、西表港(白浜)着。2時西表出港するも浅瀬に乗り上げ、満潮まで待機となる。クリブネを雇い粗納に仲里医師、比嘉校長を訪ねる。2時間ほどで帰船。12時出帆。		3-14	

6/2	7時与那国に上陸。入福旅館に入るが、入波平という人の座敷に移る。島の有力者を訪ね調査の便宜を依頼。			与那国での世話：砂川校長	3-14
6/3	土地の物知り・吉本に司達からの神歌の採集について相談。11時から古老たちへ聞き取り調査（出生、結婚、葬式、年中行事等）。			調査：崎原与利、松竹真与、喜久山ナサ 通訳：宮長次郎	
6/4	与那国の民謡を採集する予定であったが準備が整わず、次の日へ延期。「やまと墓」を役場の生盛事務員の案内で見学。馬で「三人の台」の海岸へ。町の銭湯へ入る。□時半頃、女子青年学校を参観し、1時間ほど話をする。	やまと墓、「三人の台」の写真撮影。			3-17
6/5	朝早く起き、学校の先生方のところへ調査の協力依頼に行く。午前10時に dunta のインフォーマントが前へ、小学校の先生に速記してもらおう。昼食後司達4人から「のり」との採集、6時頃打ち切り。				
6/6	午前9時半頃から午後4時頃まで崎原・松竹老人よりジラバ・ユンタの採集。浦崎から与那国におけるテクノニミーについて聞く。5時から6時まで青年学校を参観、講演をする。			速記：前新加太郎、新里静枝、金城ソル 調査補助：浦崎□日章、新里郵便局長	3-22
6/7	午前5時起床。蓋盛常介所有の新栄丸に乗り込んでカツオ釣りに出かける。午後9時頃から小学校で村の有志と座談会。	カツオ釣りの様子を写真撮影。			
6/8	朝、崎原・松竹老人が河村の謝礼の返礼に来る。浦崎を通訳に呼んでテクノニミーについて聞き、一昨日誤聞した点などを改める。午後4時、曲玉を見せてもらいに上田巡査部長と砂川校長の案内で玉を管理している家を回ったが、見せてもらえず断念。吉本のところへ行き、島の形象文字や家判を見せてもらい、写真撮影。午後6時頃、小馬に乗り dungda (人量田[人升田]) を見に行く。午前1時半頃金栄丸に乗り込み2時頃出帆。	形象文字・家判を写真撮影。 dungda (人量田[人升田]) を写真撮影。			2-18~22
6/9	午前9時半西表に入港、12時出港。浦崎視学と15日までの予定を相談。喜舎場を訪ねて話をし、調査予定を調整。足のむくみ（脚気気味）が見られたので11時頃、牧志医師に診察してもらおう。牧志宅の物干し台で観月会。				
6/10	午前7時半頃糸満のクリブネが迎えに来、船出は7時50分。小浜までは順風であったので2時間半で到着。港から小学校へ行くが、校長は島の老人達をつれて西表へ見学へ行っており、調査が不可能なことを知り、くりぶねで古見へ行く。が、古見の言葉の通じる教員が不在のため小浜へ戻る。宿は青年団の副会長・永田正助宅へ案内される。夕食後、81歳の宮城美於利さんに来てもらい調査をしたが、体調が良くないため1時間ほどで中止。				3-23

6/11	8時頃から宮城美於利に來てもらい、永田正助の通訳で冠婚葬祭の土俗について調査。「ノリト」「神歌」採集の調整を校長と山城浩訓導に依頼。			
6/12	村の有力者の老人達に集まってもらった山城訓導宅で調査の主旨説明をし諒解を求め。老人達の態度が好意的になるも神事に關しては司らにも相談しなくてはならないと、河村は昼食も兼ねて一旦宿へ引き揚げる。午後3時に迎えが来て司の家に招かれ、神事についても話してもら。季節風が強く新城方面に船が出せないため小浜にもう1泊する。			
6/13	午前9時過ぎに小浜を帆船で出発、11時過ぎに石垣へ到着。午後3時宮良行きバスを利用して宮良小学校へ行き半嶺訓導、字会長、区長らに神事に関する調査を依頼、承諾を得る。	出発までの世話：永田	3-26	
6/14	午前、海南時報の大浜が来訪、与那国のテクノニミーについて話す。午後4時から登野城小学校で70人ばかりの教育委員会講演。8時頃から料理屋・十八番で教育部会幹部達の歓迎慰労会。出席の校長達に調査について依頼。辻の踊りを見る。「八重山の歌をも聞かしてくれたら面白いのに！」			
6/15	午前8時に農学校の教頭が迎えに來る。農学校で2時間ほど講演。午後5時半、湖南丸に乗り込む。8時石垣出港。		4-1	
6/16	午前6時頃、宮古港に入港。7時過ぎ発動機船に乗り込み上陸。7時半に日の丸旅館へ入る。支庁へ行き片長へ挨拶。その後学校、新聞社、町役場、警察、郵便局、測候所等に挨拶回り。宮古高女で3年生の授業を参観。夕方、平良寛良が訪問、明日からの調査で狩俣方面の案内をもらう。		4-1	
6/17	平良寛良の案内で自転車で狩俣へ向かう。帆船を雇って大神島へ午後1時頃渡る。島の有力者を集めてもらい、神事に関する調査協力を依頼。納得してもら。午後4時、帆船で池間へ向かい、1時間ほどして到着。地元の有力者がなかなか集まらなかつたが、狩俣へ帰ろうとした6時頃、有志が来てくれたので30分ほど説明を行う。狩俣で鎌倉[名の記載なし]の調査について地元の評判を聞く。11時過ぎ、校長の留守宅へ泊めてもらう。	狩俣から同行：平良恵祥 池間での世話：饒平名	4-6	
6/18	朝早く乗合バスで狩俣を發つて平良へ戻る。平良で教育部会があり、午後4時から講演を行う。講演後、城間と下地馨が話しに來て、6時頃自転車で島尻に向かう。出発間際に漲水御嶽で女性達の雨乞	漲水御嶽での雨乞いの踊りを写真撮影。	4-6	

		いの踊りを見る。島尻の有力者達に会い調査依頼。有力者たちは司達を説得することを約束。島尻の民家に泊めてもらう。							
6/19		平安名訓導の下宿している家に村の有力者を集まってもらい、調査の説明・依頼。納得してもらい。有志が朝、挨拶に来る。自転車で平良へ帰る。来間へ行く予定が1日延期。砂川・友利行きに変更。西城校の下地馨が案内。宮古農場までバスで行き、農場で宮古馬を借りる。友利・砂川でそれぞれ1時間以上かけて調査の説明と依頼。砂川小学校校長宅に泊めてもらう。							4-7
6/20		友利の川野の親戚の家に、友利・砂川両集落の司、老人4名に集まってもらい調査。午後4時に神事に関する調査を打ち切り、城辺、西城を経て8時宮古農場に到着、馬を返して8時半のバスで平良へ帰る。[城辺]島尻勝太郎訓導が写した「宮古島旧記」を1部貰って帰る。		友利で「・・・その上写真もとって送って貰へるといふので、すっかり皆ほがらかくなってよるこんで教えてくれた。」					4-8
6/21		午前10時の下地行きバスで下地へ行き、浜まで歩く。来間島へ渡るため対岸に向かって手拭・浴衣を振って合図1時間ほどして対岸から迎えが来る。午後、来間島の見学。晩に島の有志が集まってもらい調査について依頼、明朝来てもらうよう約束。11時頃散会。					来間から朝り船の迎えを手配：長田校長 漕ぎ手：生徒たち		4-9
6/22		朝早く司達に集まってもらい予定だったが来なかったため国仲先生に案内してもらい「ミヤーカー」を見学に回ったが、国仲も遠慮があるのか、見たいところは見せてもらえなかった。午後になっても司達は個人のお祭りに行き集まらな。河村も司の祭りを見に行くと、来間の調査はあきらめて引き揚げる。「ミヤーカー」の小さい瓶を記念に持って帰る。							
6/23		午前中、来間から借りてきた資料の写しなどをしして過ごす。午後、平良寛良に来て貰い、ユタの祈禱の形式・内容等について調べる。多良間の村長が訪問。夕食後、叙勲された城間にお喜びを兼ねて訪問。帰りに雨乞いの踊りを見る。							
6/24		午前10時半、親和丸に乗り多良間へ向かう。午後4時半多良間到着。役場の隣の診療所が空家なので滞在させてもらう。夜に集落の各支部長が集まって貰い、研究方針について諒解を願うつもりが誰も来なかった。疲労のため早く就寝。					親和丸の船長室に同室：下地口行多良間 小学校校長		4-11
6/25		午後3時、垣花春公を通訳に津嘉山翁から神事について調査。							4-11
6/26		津嘉山翁、當間徳康翁に来てもらい9時から、一般土俗、家族制度、財産制度等に関する調査。夕方調査の後山内朝保、下地寛行、垣花							4-11

		春公の各氏と「ヤマトピトトンバラ」の見学に行く。夕食後、役場職員・教員合同の歓迎懇親会に招待される。			
6/27	4-14	水納分教場の西平先生から、水納は水に困っていると聞いていると聞いていたので、水を親和丸で運ぶ計画を立てるが、実際はそれほど切迫していないとのこと。午後2時割り船で出発、1時間半で到着。船賃その他、値をつり上げられる。			
6/28	4-14	午前、老人を相手に調査。午後、昼寝の後1人で方々の民家をたずねて歩く。水納島の世情について記述。	通訳：知念		
6/29		新垣という人の割り船に便乗させてもらって多良間へ帰る。船賃の代わりに酒1升を贈る。			
6/30	4-15	多良間のシツ祭り[スツウブナカ]見学。午前1時過ぎに目が覚めると祭りの歌声が聴こえたので急いで出かける。学校の先の井戸(1時50分まで)、ヤツカヤツカの踊り→フダヤ(2時頃から2時50分)終了後診療所へ帰って寝る。一眠りしてから山内が起こしくなる。8時からフダヤヤヤヤへ行く。小屋がけの祭場ができており、上座に案内される。11時頃一度帰り昼食後また出かける。ナガラヤヤ→フダヤヤ→パイドユニガマー→アライキと4集落の祭場を全部回る。夜半からは特にアライキの方でたいまつを回し、2時半就寝。			
7/1	4-15	朝6時に仕度をしてフダヤの最後の祭りを見学。「ヤツカヤツカ」→おさめの「ネリ」のあと歌を歌いながら集落に帰る→集落で「クイチヤ」。10時過ぎに帰宿、食事。午後休息。			
7/2		馬を借りて普天間、塩川、大和人トンバラを回る。一度宿へ帰ってから集落内の御嶽を見て回る。夕方5時頃から「土原豊見親夫人」のウブミヤカを開いて見る。	ウブミヤカ開け：学校の小使い、山内、下地寛行、近所の人々		
7/3	4-17	午前10時45分親和丸が多良間を出港。4時間半で平良に到着。日の丸旅館に入るが岸壁に伊良部の船が出ようとしているのを見て、伊良部行き船に乗る。夕食後あたりから風雨が強まる。			
7/4		昨夜来の台風風雨で伊良部ことどまる。伊良部校の教員達を相手に、彼らがしてくれた予備調査に基づいて調査。夜に学校の先生達の懇親会。			
7/5	4-19	午前中、馬を頼み島尻美永の案内で通池、拝所の見学。午後、学校で中食の御馳走になってから垣花の案内で佐良浜校へ行く。先生達にもらった予備調査に基づき古老を1人呼んでもらい調査。夜は校長宅に巨介になり職員の人たちが歓迎会を催す。11時頃就寝。			

7/6	栗国良勝の案内で佐良浜の「命の出る泉」を見る。帆船を雇って池間に渡る。午後、饒平名の案内で古墳を見て回り、古い瓶を1個持って帰る。午後、女子青年会の総会があり、1時間余り話す。夜、饒平名の親戚の司を訪ねて神歌を採集。	池間で迎え：饒平名浩太郎、平良恵信	
7/7	朝9時過ぎ帆船を雇って大神島へ渡る。午後、島の老人に集まってもらうはずが来ず、河村は司たちの所へ行く。夕食後、友利津蔵、狩俣金三区長、男司の伊佐吉市が集まり調査。神事については話してもらえず、11時頃男性達を帰す。	4-22	
7/8	朝、大神島の司達が全員集合。調査の主旨を説明し理解してくれたようであったが、神事については話してもらえなかった。午後、くり船を雇って島尻に向かう（河村は島尻と狩俣を間違えていた）。島尻では豊年祭が始まっており、祭りの見学。平安名常美の宿に泊めてもらう。	4-22、24	「写真を写して貰いたいという希望者は多く、次から次から頼みこくる。少々しやくだったし、金をとって写す訳にも行かないのだからいゝ加減なところできりあげておいた。」
7/9	朝8時頃、馬を雇って狩俣へ向かう。狩俣の学校に到着し降りるす前に落馬。狩俣の校長宅で休ませてもらう。午後3時過ぎ、狩俣吉蔵字長を訪問、彼の案内で豊年祭を見学させてもらう。ウブゴフムトユでの祭祀を4時から8時15分まで見学。祭りの一員に加わって歌と踊り。	4-26	同行：平安名常美
7/10	9時半のバスで平良へ帰る。湖南丸で那覇へ向かう。	4-28	出立の手伝い：平良寛良夫人・城間夫人 船に同乗：青木県議
7/11	7時半、那覇上陸。県の自動車で宝来館へ行く。城間と波上宮へ参拝。午後、仲里前視学、島元前視学等を懇問、県に挨拶に行く。新崎を通して頼んであった水納島出身の川満師範生を宿に呼び寄せ励ます。晩は志同会のメンバーが話しに来て、辻の「竹の家」へ案内される。その後海岸の涼台で皆が飲むのに付き合う。	4-28	那覇に出迎え：千喜良、荒崎、川畑、比嘉、城間等志同会メンバー、平野沖繩県課長
7/12	午前8時半までに浮島丸乗船、午前9時出帆。名瀬で商人が大島袖を船に売りに来る。購入。	4-28	見送り：平野沖繩県課長、新崎視学、島元・仲里前視学、千喜良等志同会メンバー
7/13	名瀬から名瀬高女の修学旅行生一行が乗り込む。明年奄美を見る希望から、引率者で徳之島出身の神田教諭に会い話を聞く。神田教諭が協力を約束。		
7/14	7時過ぎに神戸入港、8時には上陸。神戸の水害状況をライカで撮影するが、禁制の場所であったため三宮署に連行。フィルム1本を押収される。		「その中には是非助けたいフィルムが二、三枚あるのだが止むを得ない。」